12～13 世紀カルナータカの地域勢力
―グッタの事例を中心に

石　川　　寛

はじめに

筆者はこれまでインド・デカン地方の主要な王朝である、前期チャールキヤ朝（6～8世紀）、ラーシュトラクータ朝（8～10 世紀）、後期チャールキヤ朝（10～12 世紀）の行政制度、特にその地方統治に焦点を当てていくつかの論考を発表してきた。(1) またそれら諸王朝が展開した文化についても考察を重ねている。(2)

本稿では、後期チャールキヤ朝の支配期にその従属下にあって地方統治の一端を担った小勢力のグッタを採り上げる。その主な目的は以下の通りである。

1）グッタがインドの歴史において大きな足跡を記したグプタ朝（320 頃 -550 頃）の末裔であると主張しており、その意味を考察すること。
2）上述のデカン地方諸王朝の地方統治においては、大小様々の地方勢力がその担い手として記録に残されている。その中で比較的小規模の勢力であったグッタが、12～13 世紀にその統治を拡大していった意味を問うこと。その際地域勢力間の対抗と協調の関係をできうる限り明らかにすること。
3）2）の統治拡大の過程で拠点都市グッタヴォラルの近くに当時最新の構成をとるヒンドゥー寺院が建設され、地域の宗教文化の核となった意味を考察すること。

さらに上の諸点の考察は、当該時期のデカン地方の歴史社会の推移の特質を問うという大きな問題にもつながっている。その考究のための 1 つの重要な視点を得ることも意図している。

インド社会の歴史的推移の意味を問う研究としては、早くも 1965 年に R.S. シャルマによって『インド封建制論』(3) が出版され、グプタ朝崩壊以降イスラーム教徒の政権が北インドに成立する 13 世紀初頭までのインド社会が、権力分散と経済活動の衰退を主調とする封建制社会であるとの提言がなされた。また 1980 年代以降に、このインド封建制論を批判するものとして、グプタ朝以降のインド社会を初期中世と規定し、その政治過程は、地域において社会の統合を目指す大小さまざまの政権によって性格づけられているとする

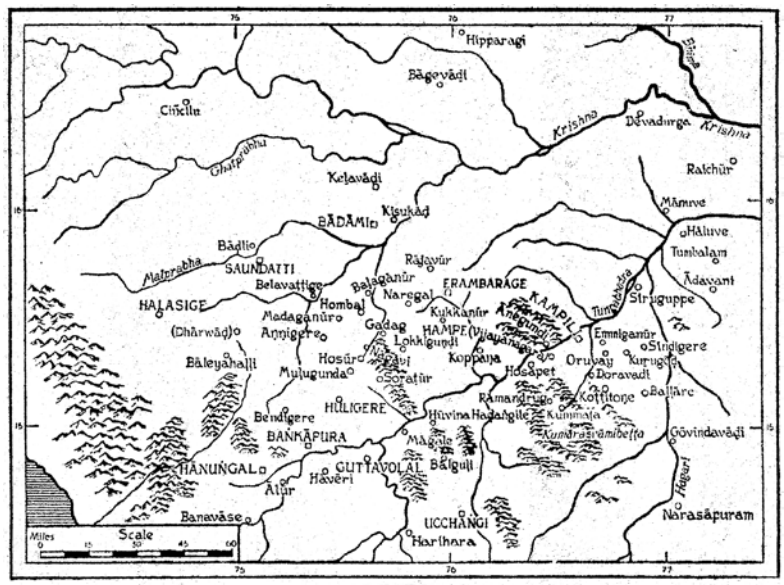
「統合的政体論」Integrative Polity が B.D. チャットーパーディヤーイ、H. クルケらによって提起され今日に至るまで議論が続けられている。(4)

本稿での考察は、そうした議論に直接対応してなされるものではないが、当該の歴史的社会を分析する視角においては、当然重なる点も出てくるので、上述の議論を適宜取り上検討を加えていくこととする。

1．地域勢力のグッタ

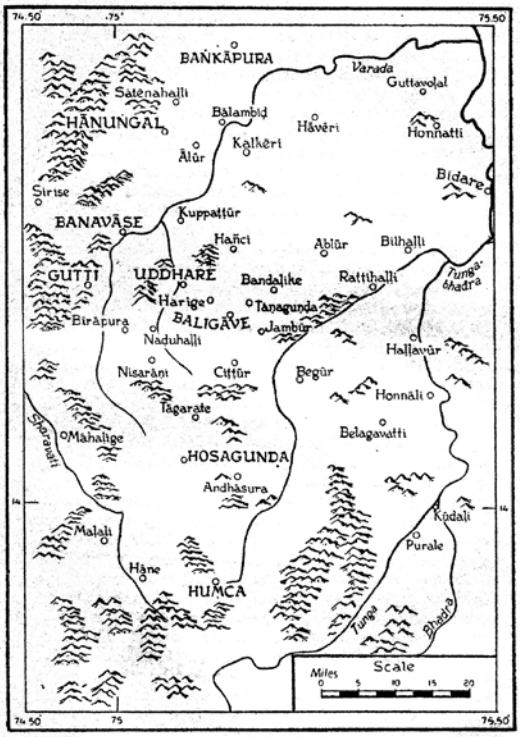
グッタ Guṭṭa は現在のカルナータカ州ハーヴェーリ県の小都市グッタラ Guttaḷa に拠点を置く小勢力である。グッタラは 12〜13 世紀にはグッタヴォラル（グッタすなわちグプタの土地、町という意味）［地図 1、地図 2 参照］(5) と呼ばれていた。近くにトゥンガバドラー川が流れていて比較的水利に恵まれた地域である。当初の拠点は近隣のチョーダダーナプラ Cauḍadānapura にあったが、勢力拡大とともにグッタラに移ったと考えられる。筆者はかつてデカン地方に中心拠点を置く大小さまざまな国家や勢力の歴史的位置づけを考察するにあたって、そのおおよその勢力範囲を把握するために、今日の行政区分を一応の尺度としてあてはめてみて、それがどれほどの広がりを持つものであったかを検討したことがある。(6)

前期および後期のチャールキヤ朝、ラーシュトラクータ朝と、パッラヴァ朝やチョーラ朝などはそれぞれカルナータカ州やタミルナードゥ州の範囲を大きく越えて支配領域を広げた南インドの主要な王朝である。それに対して、ガンガ朝、初期カダンバ朝、パーン



トゥンガバドラー川上流域

地図 1



北西部拡大図

地図２

ディヤ朝などは、州の下部単位である県の複数にまたがって支配を広げたものの州のレヴェルを越えることはなかった国家である。前二者はチャールキヤ朝やラーシュトラクータ朝に、後者はチョーラ朝に従属する期間が比較的長かった。

さらに規模の小さな勢力として、県の下位区分である郡の複数にまたがって統治したが、県の範囲を長期にわたって大きく越えることはなかったものも少なからず存在した。本稿で採りあげるグッタもそうした小勢力で、後期チャールキヤ朝やヤーダヴァ（セーヴナ）朝（12～13 世紀）に従属して地域の統治を 12 世紀から 13 世紀にかけて展開している。

グッタも典型的な小勢力であるゆえに、後期チャールキヤ朝がカラチュリ朝によって王位を簒奪され一時期その影響力を弱めた時、またヤーダヴァ朝に対抗して南のマイソール地方からホイサラ朝（12～14 世紀）がこの地域に勢力を伸ばした時期に、同じく小勢力のカダンバなどとともにその存亡をかけた重大な選択を迫られたと考えられる。その間の動向は必ずしもよく分からないが、その後の碑文の残存状況からみて、巧みに危機を乗り越えて存続したとみてよい。(7)

グッタとグプタ朝との直接的結びつきを示す系譜が伝わっているわけではない。現在のところ碑文に示された自らの主張が唯一の手がかりである。しかし筆者は、グプタ朝の衰

退が明らかとなった5世紀末から6世紀初頭の段階からほぼ6世紀にわたる長い時間を隔てて、その血筋に連なることを主張する政治勢力が出現したこと自体当時の人びとの歴史意識の問題として注目に価すると考える。ましてその拠点を置く地域が北インドのグプタ朝とは地理的にもかなりの距離を隔てた、南インド・デカン地方の南西部であることの意味も小さくないと考えている。

以下ではグッタの残した碑文を主な手掛かりとして、その歴史的意味を考えてみたい。

２．グッタの出自

グッタの碑文には、その出自について以下の表現が頻出する。

Gupta-vaṃśa-trinetra
（グプタ＝グッタ家において、3つの目を有するもの～シヴァ神のこと）[8]
Candragupta-vaṃśôdbhava
（チャンドラグプタの血筋を引いて生まれたもの）
Ujjainīpuravarādhīśvara
（卓越した都市ウッジャイニーの支配者）

周知のように、グプタ朝は320年頃マガダ地方出身のチャンドラグプタによって創始された。首都はマウリヤ朝と同じくパータリプトラに置かれている。第3代チャンドラグプタ2世の時、第2の首都にウッジャイニーが定められ王朝は最盛期を迎えて、サンスクリット文化が栄えた。文豪カーリダーサが活躍したのもこの第2の都であったと伝えられている。

碑文にあるチャンドラグプタが、グプタ朝の創始者のチャンドラグプタを指しているか、あるいは最盛期のチャンドラグプタ2世を意味してのものなのか、にわかには判じがたい。第2の首都ウッジャイニーが強調されていることからは後者の意味合いが強いように思われるが、チャンドラグプタの血筋という表現からは、両者とも含意していたとみることも可能であろう。グプタ朝の最盛期の栄光、国威の盛んな様を継承したのが自分たちグッタであると自負とそれによる自らの支配者としての正当性の主張がそこに込められていたのだと思われる。

上の例から分かるようにグプタ朝からの出自を主張するところでは、サンスクリットが用いられている。本稿で用いる史料はみな全体が古カンナダ語（歴史的カンナダ語）で記されているが、その中で所々サンスクリットの語句や表現を交えるのを特徴としている。サンスクリット由来の語も多くはカンナダ語の格変化がほどこされている。

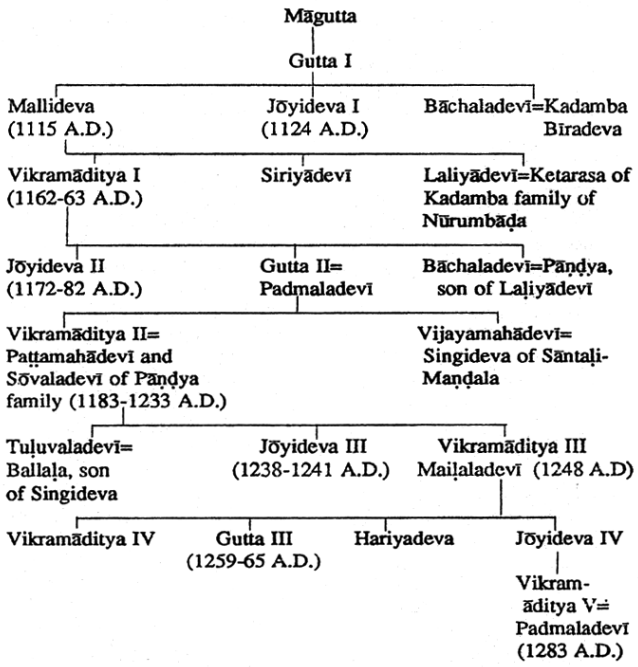
３．拠点都市グッタヴォラル

都市グッタヴォラルの名称は、グッタがそこに拠点を定めたことに由来すると考えられている。[9] しかし早くも 11 世紀後半、グッタが地域勢力としての姿を鮮明にし始めた 12 世紀初頭よりも早い段階でグッタヴォラルと呼ばれる土地が存在していたことを示す史料がある。ハーヴェーリ県ハーヴェーリ郡［地図参照］のデーヴァンゲーリに残る碑文で 1080 年の年紀を持つ。地域における紛争で勇敢に戦って死んだ者をたたえるヴィーラ・カル vīra-kalu（ヒーロー・ストーンと英訳される）として分類される碑文である。そこでは、カラチュリ家の軍勢がグッタヴォラルを襲った際、ジームタヴァーハナ家のマハーマンダレーシュヴァラのジョーイマラサのために戦った当地デーヴァンゲーリのカレヤ・ナーヤカの武勇が讃えられている。デーヴァンゲーリは現在のグッタラの近隣に位置する村で、この時ジョーイマラサがグッタヴォラルを支配下に置いていたことが判明する史料である。このカラチュリ家は 1080 年という年代からみて、12 世紀中頃から後半にかけて一時期後期チャールキヤ朝の支配権を覆したカラチュリ朝の初期勢力であったと考えられる。この時後期チャールキヤ朝はヴィクラマーディティヤ 6 世の治世（在位 1076-1127）であるが、この碑文には同王は言及されていないので、戦いが後期チャールキヤ朝の側に立ってのものであるとする確証はない。仮にジョーイマラサが後期チャールキヤ朝に従属していたとしても、ヴィクラマーディティヤ 6 世の治世初期のこの時期、グッタラの位置する現ハーヴェーリ県周辺の統治は未だ混乱した状況にあったと考えられる。しかしジョーイマラサは上位の権力者によって一定地域の支配を認められた有力者に与えられるマハーマンダレーシュヴァラ mahāmaṇḍleśvara の称号を名乗っており、この戦い以降後期チャールキヤ朝支配が安定化に向かうとその旗下に入るようになったと思われる。

グッタ家の首長の記録として明確な年代の判明するのは、後期チャールキヤ朝のヴィクラマーディティヤ 6 世のチョーダダーナプラのムクテーシュヴァラ寺院碑文[10]である。1115 年の年紀を持ち、当主のマッリデーヴァの名を記す。その前に 2 代にわたる祖先の名も記されていて、マーグッタ（マハーグプタ）とグッタ 1 世であると判明する［系図を参照］。この碑文では、マハープラダーナの称号を持つゴーヴィンダラサがバナヴァーシ・12000[11]の統治者であることが記されている一方、碑文の後半が欠損していてグッタの統治地域は判明しない。しかしこの中で、グッタは既に、

> Candragupta-mahārādhirāja-kuḷasanpūrṇa
> Vikramādityavaṃśôdbhava Śrīmat-Guttānvaya Māgutta
> （諸王中の大王、チャンドラグプタの家中の全き者、ヴィクラマーディティヤの血筋に生まれた、聖なるグッタ家のマーグッタ）

The Genealogy of the Guttas of Karnataka



系図

と形容されていることが注目される。そこにはグッタのグプタ朝の末裔であるとの主張が、宗主の後期チャールキヤ朝の公認するところとなっていた事実がはっきり示されているからである。

グッタ家の祖のマーグッタやグッタ 1 世とヒーロー・ストーンのジームタヴァーハナ家のジョーイマラサとが縁戚関係にあったのか否か、また拠点の地グッタヴォラルの名称の淵源の解明は、ともに今後の課題となる。したがって現時点では、12 世紀～13 世紀のグッタ家とは別に、グプタ朝とのつながりを主張する別の一派があって、先駆的にグッタヴァラルの地とかかわりを持っていた可能性と、この土地自体にグプタ朝に関する何らかの伝承が古くから継承されておりそれがすでに地名として定着していた可能性とを考えておく必要があろう。いずれの場合も、グッタが 12 世紀以降その勢力を拡大させていく過程で、自らがグプタの末裔であるというアイデンティティの主張とともにグッタヴォラルを支配下におさめるようになり、その時点で拠点都市もチョーダダーナプラからグッタヴォラルへと移したと考えられる。

1124 年の年紀を持つホンナッティ碑文では、後期チャールキヤ朝ヴィクラマーディティヤ 6 世の宗主権下で当主のジョーマデーヴァ（ジョーイデーヴァ 1 世）が、ポンナヴァルティ（ポンナヴァッティ Ponnavatti）・12、ベルフゲ・70 Beḷhuge、ベンネユール・12

Beṇṇeyūr の 3 つの区画をグッタヴォラルを拠点として統治していることが明記されている。[12]

マッリデーヴァの子のヴィクラマーディティヤ 1 世の 1162 年のグッタル碑文では、やはり後期チャールキヤ朝への言及はないものの、マハーマンダレーシュヴァラを称して父と同じくポンナヴァッティ・12、ベルフゲ・70、ベンネユール・12、の 3 つの行政区画を統治している。この数字はそれぞれの区画に属していた村落の数をあらわしていたと考えられている。[13] したがってこの時点では明らかに後期チャールキヤ朝の支配下にはいってその地方統治の一翼を担っていたことが分かる。1076 年に始まるヴィクラマーディティヤ 6 世の時代、特に 12 世紀以降は、後述のように両者の関係は、より明確で安定した宗主と従属する地域有力者のそれになっていったと考えられる。

いずれにせよ 12 世紀初頭に、グッタ家がグプタ朝の末裔であることを鮮明に主張しつつグッタヴォラルを中心拠点として勢力を拡大し、以下に見るように 12 世紀後半には後期チャールキヤ朝の有力な封臣の一つとなってその支配地域にシヴァ神の信仰を中心としたヒンドゥー教の文化を定着させていくことになるのである。

４．行政区画バナヴァーシの統治

デカン地方を長期にわたって支配した前期及び後期のチャールキヤ朝、ラーシュトラクータ朝など主要な王朝にとって直轄地域以外にもその統治が政治、経済、社会、文化のいずれの面においても重要な意味を持っていた地域があり、上述の王朝統治においては中心的行政区画として位置づけられていた。その 1 つがかつてのカダンバ朝の首都バナヴァーシ（バナヴァーセ）［地図参照］を中心とした地域で、刻文史料には、バナヴァーシ・デーシャ、バナヴァーシ・ナードゥ、バナヴァーシ・12000 などの名称で記載されている。[14]

バナヴァーシは現カルナータカ州北カナラ県のシルシ郡に位置している都市である。カダンバ朝はのちに独立するチャールキヤの宗主であったが、後者が独立して前期チャールキヤ朝を興すとその従属下に置かれて長い期間の雌伏を余儀なくされている。行政区画の 1 つとなったバナヴァーシの統治は、諸王朝支配下で最も信頼できる封臣にゆだねられることが多かった。その統治者に任命されることは封臣にとって名誉なことであり、王朝の権力機構の中に高い位置を占めることを意味していた。前期チャールキヤ朝期のアールヴァ（アールパ）、ラーシュトラクータ朝時代のチェッラケータナなどはその代表的な事例である。[15] グッタ家ではヴィクラマーディティヤ 1 世の子のジョーイデーヴァ 2 世の時代にその統治者として任命された記録 [16] があるが、ここではその甥でグッタ家の力が最も伸長し、かつ安定していたヴィクラマーディティヤ 2 世のカンナダ碑文から確認しておこう。

vīra Vikramādityaṃ Banavāsenāḍaṃ duṣṭanigraha śiṣṭapratipāḷanadiṃ pāḷisuttaṃ Guṭṭavoḷala nelevīḍinoḷ sukhasaṅkathā vinodadiṃ rājyaṃ geyyuttamire

（武勇優れた王ヴィクラマーディティヤが、邪悪な者を懲らしめ、徳あるものを守護しつつ、バナヴァーセ［バナヴァーシに同じ］の地域（ナードゥ）を、喜びとともに、グッタヴォラルの拠点から統治する）[17]

行政区画バナヴァーシの統治者となったことは、小地域勢力のグッタが後期チャールキヤ朝の地方統治において確固とした地位を手にしたことを意味していた。碑文の表現はその統治者としての自負を公的に高らかに宣言したものである。

バナヴァーシの統治者は、多くの場合、特に後期チャールキヤ朝時代の 10～12 世紀にはマハーマンダレーシュヴァラの称号を認められている。しかし上述の前期チャールキヤ朝時代のアールヴァやラーシュトラクータ朝期のチェッラケータナは、統治者としての任命以前に既に今日の県のレヴェルを越える範囲に勢力を有していたのに対して、グッタの勢力はそれよりもかなり小規模であったことが特筆される。むしろバナヴァーシの統治者への任命とともに勢力を拡大したといえるのである。[18] ちなみにこのグッタや後述のラッティハッリのカダンバがバナヴァーシの統治者になる以前は、1115 年にヴィクラマーディティヤ 6 世の封臣でマハープラダーナ mahāpradhāna の称号を持つゴーヴィンダラサが統治している記録がある。[19]

グッタによるバナヴァーシ統治の具体的な在り方は必ずしも明らかとなってはいないが、後期のチャールキヤ朝の 1167 年の碑文にある都市バッリガーメ（バリガーヴェとも）Baḷḷigāme［地図 2 参照］についての記述が参考になる。[20] この都市は行政区画バナヴァーシに属していたが、この時の区画の統治者は、ラッティハッリのカダンバであった可能性が高い。バッリガーメには地域の信仰を集める複数のヒンドゥー寺院が存在していた。碑文にはこれらの寺院、ヒンドゥー寺院所属の僧院組織のマタ maṭa(maṭha) に加えてジャイナ教僧院の活動の様子がかなり詳しく記されている。無料の食事提供施設 satra-śālā、病院 vaidya-śāle、避難所 āśraya などが存在していて注目される。これらは当然統治者によっても保護される存在であったと考えられるし、少し後に統治者になったグッタによってもその政策は継承されたであろうことは疑いない。

碑文にはまたシヴァ派の当時たいへん高名であった指導者ヴァーマシャクティ Vāmaśakti がラクリーシャの教えに通暁していることが記されていて、この都市にもパーシュパタ派の信仰が広がっていたことが裏付けられる。グッタ家の信仰とも共通であった。

加えて 12～13 世紀のこの時期、バナヴァーシの北東に位置するプリゲレ・300、ベル

ヴォラ・300といった行政区画内の地域では、後期チャールキヤ朝、ヤーダヴァ朝の支配下にありながらも、地域の統治者、ヒンドゥー寺院やジャイナ教僧院、都市の諸階層、商人集団、バラモン集団（mahājana）が指導層となっている比較的都市に近いアグラハーラ村落などが、時には共同して、上記王朝の支配権力からはかなりの程度自立した諸活動を見せていたこと[21]も参考となろう。地理的環境の違いは考慮しなければならないが、おそらく行政区画バナヴァーシの中でも地域社会における自立的活動は展開していたと筆者は判断している。バッリガーメのヒンドゥー寺院やジャイナ教僧院での諸活動はそれを示唆していると考える。

５．小地域勢力としてのカダンバとの関係

次にグッタと同程度の規模の地域勢力でほぼ同じ時期にその近隣を統治していたカダンバについて触れておこう。

先述のように行政区画バナヴァーシは初期カダンバ朝のかつての領域に由来し、今日の北カナラ県のほとんどすべてと、ハーヴェーリ県（旧ダールワーダ県の南部）、シヴァモッガ（シモガ）県の一部を範囲としている。初期カダンバ朝[22]の子孫は、前期チャールキヤ朝期、ラーシュトラクータ期の6〜10世紀の間長い雌伏を余儀なくされていたが、10〜11世紀頃からゴアや旧ダールワーダ県のハーンガル（ハ－ヌンガル、パーヌンガル）などに、その王統に連なることを主張する地域勢力が台頭し始める。以下に示すカダンバもそうした一派で、グッタの支配地域の南西に位置するラッティハッリ Raṭṭihaḷḷi［地図2参照］を拠点としていた。ラッティハッリは、今日のハーヴェーリ県・ヒレーケルール郡に属して、グッタヴォラルのあるラーネヴェンヌール郡とは境を接ししている。いわば隣同士の関係にあった勢力である。

ラッティハッリのカダンバは、グッタよりも早く行政区画バナヴァーシの統治者となっている。後期チャールキヤ朝の1144年、ジャガデーカマッラ2世の時であった。グッタが最初にバナヴァーシの統治者になったのは、ジョーイデーヴァ2世の1177年のことであり、宗主はソーメーシュヴァラ4世（ジャガデーカマッラ3世）に代替わりしていた。後期チャールキヤ朝はカラチュリ朝に奪われていた支配権を取り戻しはしたものの衰退期に入っていた。その不安定な時期におそらく両者は拮抗した力を持つライヴァル同士として競い合っていたと考えられる。しかしグッタとカダンバが通婚によって深く結びついていたこともまた見落とすことのできない事実である。まずグッタの草創期に、グッタ1世の娘バーチャラデーヴィー Bācaladevī が、カダンバの首長ビーラデーヴァ Bīradeva に嫁いでいる[23]のをはじめとして、このバーチャラデーヴィーの兄マッリデーヴァの娘で、この時点での当主ヴィクラマーディティヤ1世の妹のラリヤーデーヴィー Laḷiyādevī が、カダンバの次の首長ケータラサ2世 Ketarasa に嫁いでいるのである。両者の親密な関係はさ

らに2世代後のヴィクラマーディティヤ2世の時代にも続いていたことが確かめられる。グッタ家の出身で名前も先の女性と同名のラリヤーデーヴィーが同じくグッタ家のカンチャラデーヴィー Kaṅcaladevī とともにカダンバの首長ケータラサ3世と婚姻を結んでいる。このラリヤーデーヴィーは先の同名の女性の孫である可能性が考えられるが、碑文の記述からは判明しない。いずれにせよ、この女性がケータラサ3世との間に2人の子ガルダ・パーンディヤ Garuḍa-Pāṇḍya とヴィジャヤ・パーンディヤ Vijaya-Pāṇḍya をもうけた。ヴィクラマーディティヤ2世の治世にゴッタガディ Goṭṭagaḍi に建立された寺院に、その時カダンバの首長となっていたヴィジャヤ・パーンディヤが寄進していることから両者の関係がより緊密で協調的なものとなっていたとわかる。[24] ゴッタガディはその後寺院の名前にちなんでソーマナータプラ Somanāthapura と呼ばれてグッタの宗教文化の中心地となった。グッタヴォラルの近くに位置する現在のハララハッリ Haraḷahaḷli である。

このようにグッタとカダンバは、ともに後期のチャールキヤ朝の支配下の小地域勢力としてその地位上昇を競い合いながらも、数世代にわたって通婚を重ね協調の関係を築くことにも意を用いていたことが明らかである。[25] こうした関係を強めていくことは小勢力が上位の政治勢力の変遷の中で存続を図るためのある意味必然の選択であったともいえる。かつて初期カダンバ朝の最盛期の王カークスタヴァルマンが娘をグプタ朝の王に嫁がせたこと[26]が碑文に記されている。統治地域の規模は格段と縮小したものの少なくとも当事者間の意識としては、かつてのグプタ・カダンバ関係の再現を期しての通婚であったとも言い得よう。

6．シヴァ信仰としてのカーラームカ派

ここで本稿の考察に必要な限りで、グッタの信奉していたシヴァ派の思想について触れておこう。

グッタはその碑文の中で、カーラームカ（カーラムカとも）Kālāmukha と呼ばれるシヴァ派の代々の聖職者に精神的指導を仰いできたことを明記[27]している。カーラームカ派は、シヴァ神を中心的な神格として崇拝し、その行者（修行僧）は身体に塗灰し、火葬場に住んで神との合一を目指すなど、あえて奇行をなして世間一般から忌避されることに積極的意味を見出すという特異な教義を持つ。一方でヴェーダの道に従うという伝統順守の穏和な面（saumymārga）も兼ね備えている。

その宗派としての淵源は必ずしも明らかとはなっていないが、同じくシヴァ神を崇拝しラクリーシャを開祖と仰ぐパーシュパタ（獣主）派と共通する点が多い。ラクリーシャは、シヴァ神の28番目の化身であるとして信者によって神聖視されている存在である。今日のグジャラート州バローダ地方に生まれ、この派の根本聖典『パーシュパタ・スートラ』を著したと考えられているが、年代は未詳である。この派は発展の過程で、カーラー

ムカ、カーパーリカ、カウラなどの分派[28]を生んでいったとされる。1千年紀の前半に記録が残る同派の思想[29]が、カルナータカ地方にまで伝えられた前後にはカーラームカとも称されるようになったと考えて差し支えなかろう。カルナータカ地方においてパーシュパタ派の足取りを確かにたどることができるのは、8世紀前半のパッタダカルにおいてである。前期チャールキヤ朝の第8代ヴィクラマーディティヤ2世の2人の妃ローカマハーデーヴィー Lolamahādevī とトライローカマハーデヴィー Trailokamahādevī によって建立された2つの寺院に、この派の開祖ラクリーシャの像が彫刻されている。彫像はいずれも寺院の創建と同じくして刻まれたものであり、その時点までにラクリーシャの信仰が当地に伝えられていた[30]ことがわかる。

一説によるとカルナータカ地方では、パーシュパタ派とカーラームカ派はそれぞれ分派として別個に存立していたとする。しかし本稿では、両者がともに開祖ラクリーシャを重んじ、ヴェーダの道を大きく踏み外すことのない点では共通していて、たとえ信者集団が掲げる名称が2つに分かれていたとしても、ほとんど同質の思想集団とみなしうるとするフィリオザの見解[31]が妥当であると考える。カーラームカ派はラークラガーマ Lākulagāma、シャイヴァーガ Śaivāga などと総称される教理を記したアーガマ文献を重んじていたことも碑文[32]から知ることができる。そうしたアーガマ文献は、そのままの形では現在に伝わっていないが、ヴェーダの伝統に則る形でシヴァ信仰の教義を精緻なものとし正当化する内容[33]を持っていたとされる。

グッタが師事したカーラームカ派の指導者として碑文にその名が記されているのは、ラージャグル（rājaguru、王家の師）という称号を持つカリヤーナシャクティ Kalyānaśakti という人物であった。カリヤーナシャクティは、キッタガーヴィ・サンタティ Kiṭṭagāvi-santati と呼ばれる信者集団のグループを統括していた指導者で、その代々の指導者の系譜が碑文に記されている。系譜は6代前にまで遡るもので、その間の実年数はわからないが、かなり長期にわたってこの地に影響力を持っていたであろうことが推測される。そしてカリヤーナシャクティがパンチャブラフマ Pañcabrahma の思想[34]を信奉していたこと、代々の指導者の中にヴァーマデーヴァの名を持つ者がいることが注目される。

パンチャブラフマとは、シヴァ神の顕現のあり方を示す語で、本質的には形を持たない（niṣkala）シヴァがこの世に顕現する時、サダーシヴァ Sadāśiva、もしくはマヘーシュヴァラ Maheśvara として顕現する[35]ことになるが、前者の場合その姿が5つの顔（ānana）として表象される。その5つを総称してパンチャブラフマというのである。5つはそれぞれイーシャーナ Īśāna、ヴァーマデーヴァ Vāmadeva、サドゥヨージャータ Sadyojāta、アゴーラ　Aghora、タトプルシャ Tatpurṣa と称される。また、それぞれが、「中空・空間」「水」「大地」「火」「空気」の5つの要素や現象を統括するという世界観に結びついているのをはじめとして様々な解釈[36]が伝統的になされている。サダーシヴァの像としては、ムン

バイ沖エレファンタ島の石窟の例[37]が世界遺産に登録されていることもあり、大変よく知られている。3つの顔が表現されている中で、正面がサドゥヨージャータ、その右（観者から向かって左）がアゴーラ、その左がヴァーマデーヴァである。他の2面は表現されていないが、可視的な形をとっていなくとも、後方と上方を向く形で存在しているとされる。サドゥヨージャータは穏和な表情、アゴーラは忿怒の表情、ヴァーマデーヴァは柔和な表情を見るものに感じさせる。ヴァーマデーヴァはシヴァの配偶神パールヴァティーを表しているともされる。また、しばしばヴァーマデーヴァが創造、サドゥヨージャータが維持、アゴーラが破壊を称しているとも解釈される。ヒンドゥー信仰一般にみられる、永遠の世界のサイクルの中での創造神としてのブラフマー、破壊神としてのシヴァ、維持神としてのヴィシュヌの三神（trimūrti）のすべてをシヴァが一身に体現しているとする理解である。

ヴィクラマーディティヤ2世の1188年の碑文の中では、大臣ソーマの徳をサダーシヴァに喩えて表現している。

> Sōmangêkamukhaṃ dvimukhaṃ trimukhaṃ caturmukhaṃ pancamukhaṃ
> （ソーマは、1つの顔、2つの顔、3つの顔、4つの顔、5つの顔をもつ（サダーシヴァ）である）[38]

こうしたシヴァ派の思想は、グッタの寺院の彫刻など造形の面にも色濃く反映するようになる。次項でグッタが拠点都市グッタヴォラル近くのハララハッリに建立したソーマナータ寺院の造形を確認しよう。

7．ソーマナータ寺院の造形

次にハララハッリに今も残るソーマナータ寺院 Somanātha 寺院（図1を参照）とその彫刻を手掛かりにグッタの展開したヒンドゥー文化の特質を考察しよう。

ソーマナータ寺院は正面最奥の祠堂（ガルバグリハ garbhagṛha）のほかに、その前室の左右にも張り出した形で祠堂を持つ複合的な構成（図2を参照）をとっている。いずれの祠堂にも中心の神格であるシヴァを表すリンガが祀られている。寺院外壁は多くの彫刻で飾られているが、アゴーラやマヘーシュヴァラ（図3）などシヴァ神の諸相を示す像が多数を占める。

またその多くが舞踏のポーズをとっていることも注目される。（図4および5のナテーシャ像を参照）シヴァ神の舞踏像としてはナタラージャ Naṭarāja（舞踏王としてのシヴァ）の像が広く知られており、南インドにもタミル地方のチョーラ朝のブロンズ像を中心に多くの優品が残されている。チョーラ朝の作例はその細部の表現に至るまでほとんど儀軌

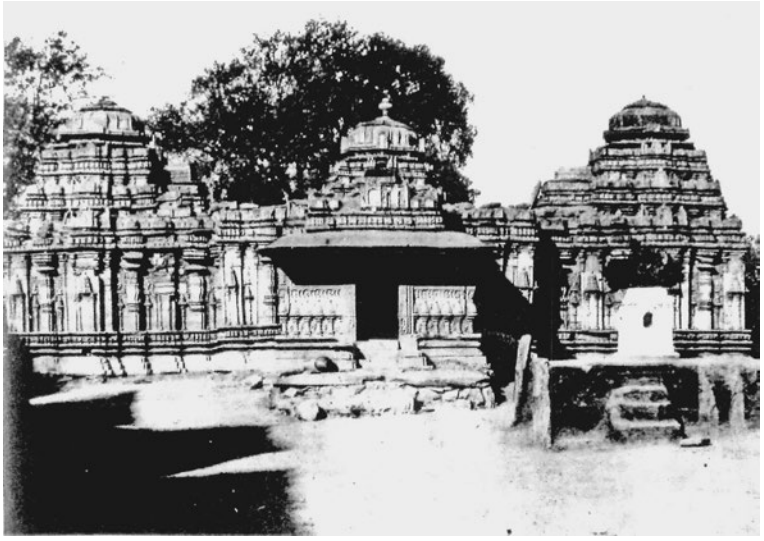
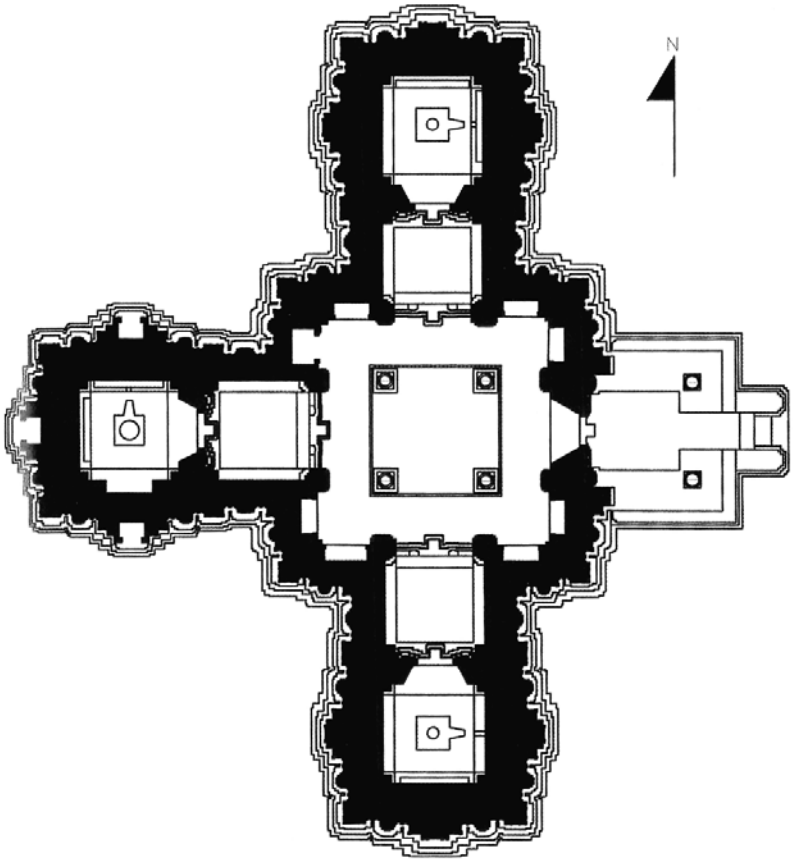


図１　ソーマナータ寺院



ソーマナータ寺院のプラン

図２

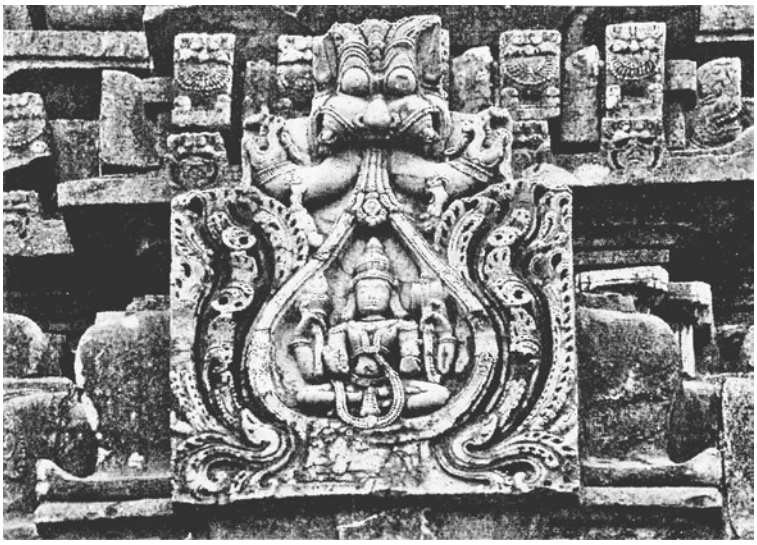


図３　マヘーシュヴァラ

図４　ナテーシャ像

図５　ナテーシャ像

（イコノグラフィー）が確定しているといってよいが、ここでは悪魔アーパスマーラを直接踏み懲らしめているものもいないものもあり、シヴァ神の持物（アトリビュート）の表し方にもかなりのヴァリエーションがあって注意を引く。いってみれば、その作例には地方的な特徴が表出していて、彫刻する者の自由度がかなり許容されている趣がある。シヴァ神の像を上まわるほどに単独の踊り娘像多く表現されているのも大きな特徴である。

しかし、全体の枠組みはアーガマ文献にうかがえるシヴァ信仰の思想に従っており、それを自らの文化として解釈し表現する試みがなされていたといえよう。またその表現の諸相は、ヒンドゥー教の文化が地方的特徴を帯びつつも地域の人びとのアイデンティティの核となって定着していく過程の一端を示すものでもある。

おわりに

上に見てきた小地域勢力グッタが展開した 12〜13 世紀の歴史は、後期チャールキヤ朝からカラチュリ朝を経てヤーダヴァ朝・ホイサラ朝と上位の政治権力が推移する中で、ある時期勢力を拡大することに成功しそれをよく維持してきたといえるものであった。その過程でヒンドゥー教を中心とした地域の文化が振興したことは明らかである。中心拠点グッタヴォラルの近郊にソーマナータ寺院が建てられたソーマナータプラ（現在のハララハッリ）の発展はその顕著な例である。

同様の事例はムクテーシュヴァラ寺院 Mukuteśvara が建てられた最初の拠点ムクティクシェートラ（現在のチョーダダーナプラ）をはじめとして、ホンナヴァティ（現ホンナッティ、ホンナッリーともいう）、ハールヌール（現ハーヴァヌール）、フッルニ（現ガラガナート）、アガデ（現アガディ）カンナヴァリ（現在も同名）の各地方都市についても指摘できる。ムクティクシェートラ以下の諸都市はいずれもグッタが統治していた行政区画ホンナヴァッティ・12 に所属していた。[39]

こうした地域における勢力拡大と宗教文化振興に正当性を与えていたのが、グプタ朝の血筋に連なるという主張であったのは明らかである。本稿の 2 節 3 節で示したように、結果的にそれが宗主の後期チャールキヤ朝にも承認され地域に浸透していたことは、インドにおける歴史伝承の問題を考えるうえで大きな意味を持っていよう。

グプタ朝時代に今日にまで伝えられている多くのサンスクリット文献が成立し、それが古典として長く尊重されてきたことは広く知られている。しかしその歴史について一定の知見が確立するのは、J.F. フリートによって主要史料である碑文や銅板文書が校訂・出版[40]された 19 世紀末以降のことである。その後新たに発見された碑文や銅板文書を加えた史料集成の改訂版が刊行されるのは 1981 年[41]まで待たねばならない。早くも 12 世紀の段階で 1 つの地域勢力であるグッタが同王朝についてかなり正確な認識を持っていたことは特筆すべきことと言って良い。その末裔という主張が仮に事実ではなかったとして

も、自らがグプタ朝についての伝承の直接的担い手であったか、もしくはその伝承にきわめて近い位置に身を置いていたかのいずれかの可能性が考えられよう。いずれの場合であっても、グプタ朝と同時代の国家であったデカン地方のヴァーカータカ朝やカダンバ朝がグプタ朝と婚姻を結んでいることと何らかの関係があると推測され、特に6節で取り上げた後者の分派である地域勢力カダンバとの関係のさらなる解明が鍵となる。それは今後の課題としたい。

また本論では論じることができなかったが、商業を中心とした経済活動においても、グッタの統治地域が積極的な動きを見せていたことを示す史料がある。グッタヴォラルの位置するハ－ヴェーリ県に隣接するバッラーリ県ハラパナハッリ郡にあるクルヴァッティにあるヴィクラマーディティ2世の碑文[42]である。碑文には年紀がないが、それの残るマッリカールジュナスヴァーミ寺院にこの碑文と同じローカーバラナという人物の名を記す別の碑文（1181年）[43]が見つかっていることから、2つはほぼ同じ時期のものと考えられる。内容は寺院に奉仕するこのローカーバラナに対して、ある種の税の総額（herujjuṅka）[44]から1パーガ（pāga）という一定割合[45]を、おそらく定期的に寄進するというものである。寄進者は当地クルヴァッティのムンムリダンダ Mummuridaṇḍa という名の商人集団で、この商人集団が、ナーナーデーシ Nānādeśi やアイヤーヴォレ「五百人組」のスヴァーミ Ayyāvoḷe-yainūrvvar-svāmi という、南インドの広範囲にわたって商業活動を展開していた規模の大きな商業組織と提携していたことも記されていて注目される。グッタの統治地域がより広い商業ネットワークと結びついていたことが明らかだからである。「封建制論」の主要論点である、経済活動の衰退と地域の自足化とは正反対の状況がそこに見られる。

こうした事例は、統合的政体論[46]における、地方諸勢力による地域統合化の傾向の分析という議論の文脈で論じうる特徴を有していることは確かである。しかし、グッタの宗主であった後期チャールキヤ朝、カラチュリ朝、ヤーダヴァ朝などが地域に及ぼした影響力によって引き起こされた変化と、グッタをめぐる歴史事象とを同じ枠組みでランダムに論じるのは、あまりにも肌理の粗い無理な議論と言わざるを得ない。諸勢力の間には強弱様々な権力関係によって結び付けられた上下の階層性があるのは明らかであり、まずグッタと上位の支配者との関係を位置付けたうえで、その相互関係の歴史的特質を検証する必要があろう。そのためにも中小勢力の動向をこの時期の一次史料である刻文から丹念に拾い上げていくことが最重要の課題[47]であると考える。

また、グッタの残した碑文の多くはカンナダ語の美しい韻律[48]を用いて書かれている。本稿ではほとんど触れることができなかったが、その研究も今後の課題としたい。

［註］

（1）［石川 1997; 1999］
（2）［石川 2011; 2016; 2019］
（3）［Sharma 1965］、さらに早く 1956 年に、D.D. コーサンビーがその著『インド史研究序説』*An Introduction to the Study of Indian History*, Bombay, において「上からの封建制」「下からの封建制」という社会体制の差異における時代解釈を示していて、その先駆的業績に一定の評価はなされているが、今日実証レヴェルではその枠組みの有効性に様々な点で疑義が呈されている。その議論の詳細は［Kulke 1995］を参照。
（4）［Chattopadhyay 1983(1994)］［Kulke 1995：2018］
（5）［Ritti 1992］
（6）［石川 1999］　その当時のダールワーダ県はその後の行政区分の再編成によってダールワーダ県、ガダガ県、ハーヴェーリ県に細分されており当時の尺度はそのままでは通用しなくなっているので再考の必要がある。
（7）父はホイサラに従っていたが、息子の代にはヤーダヴァの配下にあった記録がある。SII. XVIII, No.265
（8）その威徳をシヴァ神になぞらえて表現している。
（9）［Ritti 1992］
（10）SII. XVIII, No.112
（11）筆者はデカン地方諸王朝の地方統治において広範に見られる行政区画の末尾に数字を付する、いわゆる行政区画の「数字付き名称 numerical appellation」についてすでに何度か論じている（［石川 1999;2008］など）。9 万 9000 までの数字については村落（grāma）の数であることを明記した史料が存在しており、その算出の基準や当時の村落の規模などについて不明な点は少なくないものの、当該区画に属する村落の数を表しているとみなすのが妥当であると考えている。実際にベルヴォラ・300 という区画の研究で、当区画に所属すると碑文に記載された村落のうち 244 の村落が、現有村落に同定されている例がある。Cf.［Ritti 1968］
（12）SII. XVIII, No.124
（13）［石川 1997］
（14）バナヴァーシなどデカン地方諸王朝支配下の行政区画については［石川 1997］を参照。
（15）バナヴァーシの統治の変遷については、［Ishikawa 1995］［石川 1997］［石川 2008］などを参照。
（16）KI. VI, No.31
（17）SII. XVIII, No.295
（18）後期チャールキヤ朝のジャヤシンハ 2 世（ジャガデーカマッラ）の治世（1015-1044）に、下位の封臣のマートゥ家のシリヤーガラサ Siriyāgararasa が 12 カ村と 70 カ村程度の 2 つの区画を統治していた時、欠損によって名前は判明しないものの、マハーマンダレーシュヴァラの称号を持つ上位の封臣は、やはりバナヴァーシ・12000 の統治者であった。SII. XVIII. No.43
（19）SII.XVIII, No.112.　マハープラダーナは、一般に大臣など政府の高官を意味する語である。
（20）EC. VII（Old ed.）Sk.102.　都市バッリガーメの繁栄については、［Raghunath Bhat 1995］も参照。
（21）［石川　2017］を参照。
（22）6～8 世紀のカダンバ朝を後代の分派と区別するとき、初期カダンバ朝 Early Kaḍambas と言い慣わすのが通例である。
（23）［Ritti 1992］を参照。
（24）SII. XVIII, No.295
（25）ヴィクラマーディティヤ 2 世には、カダンバのヴィジャ・パーンディヤの 2 人の娘パッタ

マハーデーヴィー Paṭṭamahādevī とソーヴァラデーヴィー Sovaladevī が嫁いでいた。また、両家はともにカーラームカ派のカリヤーナシャクティを宗教指導者として仰いでいたことも判明している。そうした事情も含めて小勢力のカダンバについては稿を改めて論じる予定である。

（26）［石川 1999］を参照。

（27）SII. XVIII, No.296

（28）シヴァ派一般の思想の概略については、［Agrawala 1966;1984］［Kramrisch 1981］および［早島ほか 1982］161-166 頁、特にパーシュパタ派については 165-166 頁を参照。

（29）グプタ朝時代には、王家の信奉するバーガヴァタ派のヴィシュヌ信仰と並んで、パーシュパタ派のシヴァ信仰が盛んであったとする見解もある。Cf.［Agrawala 1966:1984］p.47

（30）フィリオザはトライロケーシュヴァラ寺院碑文に記されたジュニャーナアーチャーリヤをカーラームカ派の聖職者としているが、この碑文の記述のみでは、寺院にあるラクリーシャの像とこの聖職者との関係が証明されたとはいえない。現時点ではその可能性を考慮するにとどめておくことが妥当であろう。Cf.［Filliozat 2012］pp.30-31

（31）Cf.［Filliozat 2012］pp.30-33

（32）SII.XVIII, Nos.295,296. また、ヤーダヴァ朝ビッラマ 5 世の 12 世紀末ごろのカンナダ碑文にも、Sōmaśṃbhu Lākuḷasiddhāntādi sakalâgama「ソーマシャンブは、ラークラシッダーンタをはじめとするすべてのアーガマを（重んじ）」とあり、ラクリーシャを崇拝する派が、アーガマを重んじていたことがわかる。SII.XX, No.179

（33）Cf.［Filliozat 2012］pp.29-67

（34）Śrī Vāmadevamuni-san（欠損）kṛta pañcabrahman-angīkṛta sakalaja-stutyaṃ
「すべての人びとに称賛されているヴァーマデーヴァ師は、パンチャブラフマを信奉し」とある。

（35）サダーシヴァでは、顕現と非顕現の両方の場合があり、マヘーシュヴァラになると完全に顕現して様々な形をとるとされる。

（36）パンチャブラフマについて、［Agrawala 1966:1984］を参照。

（37）これをマヘーシュヴァラの顕現とみる解釈もあるが、ここではサダーシヴァ説をとる。ほかにもいくつかの解釈があるが、ここに列挙する煩は避ける。いずれにしても、歴史的に何か 1 つの解釈のみが正当であるという議論には至らなかったようである。いずれの解釈もそれが受け入れられてきた地域や時代があって今日に至るまで伝承されてきたと考えるべきであろう。なお、エレファンタ石窟の年代については、［石川 2006］［Ishikawa 2012］を参照。

（38）SII. XVIII, No.295

（39）SII. XVIII, Nos.244, 296

（40）Cf.［Fleet 1888］

（41）Cf.［Bhandarkar, *et.al*. 1981］

（42）SII. IX, No.391

（43）SII. IX, No.389

（44）Cf.［Ritti 2000］pp.36, 38

（45）Cf.［Ritti 2000］p.106

（46）この議論は政治や経済ばかりでなく、社会・文化のさまざまな事象にその対象を広げていて、簡単に要約することは出来ないが筆者なりの理解を示しておく。グプタ朝以降出現した大小さまざまな国家によって、1）諸国家形成の過程で、その影響下に置かれる社会範囲が比較的地域の隅々にまでひろがっていくこと（マウリヤ朝のように広大な領域を持つが、その影響力は太守が派遣された支配拠点とその周辺にのみ限定されることと対比される）、2）1）の過程に伴って、それまで政治的支配の周縁にあった部族が国家的支配の中に組み込まれ、その多くが農民化していくこと、またそれによって新しいカースト（ジャー

ティ）が形成されていくこと、3）1)、2）によって地域には多くの場合ヒンドゥー教的身分秩序に基づく国家社会が形成されるが、それを枠付けているのは当時成立しつつあった地域の言語であり、シヴァやヴィシュヌの信仰を中心に据えながらも土着的な神々や儀礼を多くとりこんで展開する地域の個性を強く帯びた宗教文化であった。また、上述の 3 つの過程を通じて分権的体制は強まるが、地域の経済はむしろ活性化されていくことも指摘されている。こうした「統合的政体論」では、地域を統合する国家は遅くも 2 千年紀の前半には、インド亜大陸の各地に成立していたとする。この議論は時代把握の点で、グプタ朝崩壊後の分権的体制と経済規模の縮小を重視する「インド封建制論」とは一線を画し、「アジア的生産様式論」が強調する、政治的支配権力の変遷にもかかわらずその専制下に置かれて発展の契機から遠ざけられた停滞的な共同体社会の存在という構造的な理解に対しても批判的な立場をとっている。［Kulke 1995］および［Thapar 2002］pp.445-446 を参照。

（47） その際、特に社会・文化の観点から、現在京都大学拠点の共同研究（KINDAS）によって議論されている、「多中心性」の概念をより精緻なものとしていくことが、インド社会の歴史的展開を把握するうえで有効であると考えているが、それについては機会を改めて論じたい。［田辺 2019］を参照。

（48） 碑文の韻律については、さしあたって［Filliozat 2012］を参照。

主要参考文献

石川寛、1997「デカン地方古代諸王朝の行政区画―主に numerical appellation の解釈をめぐって」『東洋学報』74 巻 1・2 号

同、1999「古代デカンの国家―カダンバ朝を中心に」『岩波講座世界歴史 6』岩波書店

同、2006「エレファンタ石窟考―造営の年代と担い手についての試論」『東京女学館大学紀要』第 3 号

同、2008「古代デカン国家の地方統治―ラーシュトラクータ朝後半期の事例を中心に」『東洋学研究』第 45 号、東洋大学・東洋学研究所

同、2011「デカン南西部カルナータカ地方の建築家・彫刻家・石工たち」『東洋学研究』第 48 号、東洋大学・東洋学研究所

同、2016「パッタダカル碑文をめぐる諸問題」『高橋継男教授古稀記念　東洋史論集』東洋大学文学部・東洋史研究室

同、2017「デカン地方諸王朝の地方統治―ベルヴァラ・300 およびプリゲレ・300 の統治を中心に」［太田（編）2017］所収

同、2019「前期チャールキヤ朝史の再検討（その 3）―第 3 代マンガレーシャ時代の社会と文化について」『東洋学研究』第 56 号、東洋大学・東洋学研究所

太田信宏（編）、2017『前近代インド社会におけるまとまりとつながり』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

辛島昇（編）、2007『世界歴史大系　南アジア・３』山川出版社

高島淳、2007「シャイヴァ・シッダーンタの成立」（［辛島（編）2007］所収）

田辺明生、2019「南アジア型発展径路とは何か―長期的視点から考える」（［藤田ほか（編著）2019］所収）

藤田幸一・大石高志・小茄子川歩（編著）、2019『南アジアの人口・資源・環境―生態環境要因を重視した南アジアの長期発展径路解明のための中間報告』人間文化機構、ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「南アジア研究」、京都大学拠点（KINDAS）・研究グループ 1

早島鏡正・高崎直道・原実・前田専学、1982『インド思想史』東京大学出版会。

Agrawala, Vasudeva S. 1966 (1984 2nd.ed) *Śiva Mahādeva, the Great God : An Exposition of the Symbolism of Śiva*, Varanasi, Prithivi Prakashan.

Bhandarkar, D.R., Chhabra, B.Ch., and Gai, G.S., (eds.) 1981 *Inscriptions of Early Guptas*, CII. Vol.III (revised), New Delhi, Archaeological Survey of India.

Chhabra *et.al*. 1992 *Reappraising Gupta History for S.R.Goyal*, New Delhi, Aditya Prakashan.

Chattopadhyay, B.D. 1983 (1994) 'Political Process and Structure of Polity in Eary Medieval India, Problems and Perspective.'（Presidential Address of Indian History Congress 44th session, 1983, in［Chattopadhyay 1994］）

Ditto., 1944 *The Making of Early Medieval India*, Delhi, Oxford University Press.

Derrett, J.Duncan M., 1957 *The Hoysaḷas : A Medieval Indian Royal Family*, London, Oxford University Press.

Dikshit, G.S. 2011 *South India : An Expedition into the Past*, Karnataka Itihasa Academy, Bengaluru, Pragati Graphics.

Filliozat, Vasundhara, 1995 *The Temples of Mukteśvara at Cauḍadānapura*, New Delhi, Indhira Gandhi National Centre of Art.

Fleet, J.F. (ed.) 1888 *Inscriptions of the Early Gupta Kings and their Successors*, CII. Vol.III, Delhi, Archaeological Survey of India.

Ditto., 2001 *Kālāmukha and Pāśupata Temples in Dharwar*, Chennai, The Cuppaswami Sastri Research Institute.

Filliozat, Vasundhara & Pierre-Sylvain, 2012 *Kālāmukha Temples of Karnataka, Art and Cultural Legacy : Somanātha at Haraḷahaḷḷi and Kaḍambeśvara at Raṭṭihaḷḷi*, New Delhi, Indira Gandhi National Centre for the Arts.

Ishikawa, Kan, 1995 "Formation and Governance of Banavāsi-12000 under the rule of the Chāḷukyas and the Rāshṭrakūṭas" (L.K. Srinivasan & S. Nagaraja, *ed., Śrī Nāgâbhinandanam* : M.S. Nagaraja Rao Festschrift, Bangalore.)

Ditto., 2006 "Mahārāṣṭraka-traya of Aihoḷe praśasti"（Arundhati Baneruji *ed., Hari Smṛti : Studies on Art Archaeology and Indology* – Papers Presented in Memory of Dr. Haribishunu Sarkar, Vol.1 New Delhi, Kaveri Books.）

Ditto., 2012 "On the Date and Patronage of Elephanta : Historical Background of the Grear Cave Temple" (Shrinivas V. Padigar & V. Shivananda, *eds., Pratnakīrti-Recent Studies in Indian Epigraphy History, Archaeology and Art : Essays in Honour of Prof. Shrinivas Ritti*) Delhi, Agam Kala Prakashan.

Kramrisch, Stella, 1981 *The Presence of Śiva*, Princeton, Princeton University Press.

Kulke, H. (ed.) 1995 *The State in India 1000-1700*, New Delhi, Oxford University Press.

Ditto., 2018 *History of Precolonial India : Issues and Debates*. New Delhi, Oxford University Press.

Mahalingam, T.V. 1955 *South Indian Polity*, Madras, University of Madras.

Raghunath Bhat, H.R. 1995 "Some Artists of Early Medieval Baḷḷigāve, Karnataka" (L.K. Srinivasan & S. Nagaraja, *ed*., *Śrī Nāgâbhinandanam* : M.S. Nagaraja Rao Festschrift, Bangalore.)

Ritti, S.H. 1968 "Beḷvola-mūnūru", *Karnataka Bharati*, Vol.1, part1, Dharwad, pp.80-86

Ritti, Shrinivas. 1992 *The Guptas (Guttas) of Karnataka*,［Chhabra *et.al*.1992, 206-211］

Ritti, Shrinivas, *et.al*., 2000 *Descriptive Glossary of Administrative Terms in Ancient Karnataka*, Mysore, Directorate of Archaeology & Museums.

Sharma, R.S. 1965 *Indian Feudalism*, Calcutta, Calcutta University.

Thapar, Romila, 2002 *Early India : From the Origins to A.D.1300*, London, Allen Lane & Penguin Books.

Ditto., 1966 *A History of India 1*, Harmondsworth, Penguin Books.（ロミラ・ターパル『インド史・2』みすず書房、特に第 11 章「地方国家と封建制度（800-1200 年頃）」

史料集とその略号

CII : *Corpus Inscriptuonum Indicarum*, New Delhi, Archaeological Survey of India.

KI : *Karnatak Inscriptions*, Dharwar (Dharwad) ,Kannada Research Institute Karnatak University.

SII : *South Indian Inscriptions*, New Delhi, Archaeological Survey of India.
EC : *Epigraphia Carnatica*, (Old Editions) Mysore.

キーワード：グッタ、グプタ朝、行政区画バナヴァーシ、シヴァ派、
カーラームカ（カーラムカ）